

## 【研究ノート】

# ダーウィンをめぐる三題噺

的射場 敬一

## 目 次

はじめに

- 1 ガラパゴスー「太陽の沈むことのない帝国」の交代ー
  - 2 ウォーキングフットパスと囲い込み運動ー
  - 3 ダーウィンー父と子ー
- 結びに代えて

## はじめに

チャールズ・ダーウィン (Charles Robert Darwin, 以下ダーウィンと略す) は、2000年には、イギリスの10ポンド紙幣のモデルとなっている。2002年にBBCの後援によって行われたイギリスの調査「もっとも偉大なイギリス人」の4位<sup>(1)</sup>に選ばれている。ダーウィンが50歳の時(1859年)に進化論についてまとめた『種の起源』を発表したが、その時、喧々譁々の論争が巻き起こったのが嘘のような人気ぶりである。

ダーウィンは、1809年2月12日<sup>(2)</sup>にバーミンガムの西北西にあるシュルーズベリー (Shrewsbury) という町に生まれ、1882年4月19日、40年暮らしたケント州の村ダウン (Downe)<sup>(3)</sup>で、その73年の生涯を閉じている。ビーグル号での世界一周の旅は、ダーウィンとガラパゴス諸島を一躍有名にした。もしもビーグル号での航海がなければ、おそらくダーウィンの名が世に知られることはなかったであろうし、当然のことながら『種の起源』は書かれることはなかったであろう。ビーグル号の航海こそ、ダーウィンの人生の分水嶺であり、それは同時にダーウィニズムという言葉が生み出されたように、大げさに言え

ダーウィンをめぐる三題噺 (的射場)

ば人類にとっても分水嶺であった。

ダーウィンという傑物を生み出すのに与って力があつたのは、17世紀の市民革命を経て18世紀の産業革命を背景に世界の覇者の地位に踊りでた大英帝国の存在であり、そして、産業革命の中で新興ブルジョワジーとして十分な富を蓄えてきたダーウィン家とウェッジウッド家の存在である。かかる歴史的コンテキスト抜きには、博物学者ダーウィンの出現はありえなかったのではないだろうか。そういう仮説のもとに、第1章では、このガラパゴスを巡って、「太陽の沈むことのない帝国」の交代劇について少しだけ考察し、第2章では、ダーウィンの終の棲み家であるダウン・ハウス (Down House) までウォーキングしながら考えたことを書き、第3章では、ビーグル号航海に至る親子のドラマをスケッチした。

## 1 ガラパゴス —「太陽の沈むことのない帝国」の交代—

### 1.1 ガラパゴスとは？

「ガラケー」という言葉をご存知だろうか。ガラケーとは、「ガラパゴス化した携帯電話」の略であり、アップル社のiPhoneやノキア社の携帯電話などのように世界を市場とせず、日本国内のみで流通している国産の携帯電話の呼称である。日本は世界に冠たる電子機器輸出大国であるにもかかわらず、なぜか携帯電話に関しては世界標準を目指して世界市場に進出しようとはせず、日本市場のなかでのみ争い、結果として国産の携帯電話は独自の進化を遂げ、高度に発達した複雑な機能をもつに至った。だが、iPhoneなどのスマートフォンが市場に流入するやいなや、こうした携帯電話は一気にその独占的な地位を奪われることになった。そこで、他の地域との接触がなかったために独自の進化を遂げたガラパゴス諸島の生物になぞらえ、いささか自嘲的な意味を込めて、国産の携帯電話のことをガラケーと呼び表すようになった。

そのガラケーという名前の由来となったガラパゴス諸島<sup>(4)</sup>は、南米の西海岸からおよそ1000キロ先の太平洋に浮かぶ島々である。東京から福岡までがお

よそ 890 キロ、韓国のソウルまでが 1160 キロである。東京から福岡までよりは遠く、ソウルほどには遠くない距離に、ガラパゴス諸島は浮かんでいる。ダーウィンは、『ビーグル号航海記』のなかで、このガラパゴス諸島について、次のように書いている。

「元来この群島は、はじめは海賊 (Buccanier) に、後には捕鯨業者に、古くからときどき訪ねられたものであったが、最近 6 年前にようやく小さな開拓地がここに建設させられた。住民の数は 200 と 300 の間である。ほとんどすべて有色人種で、キト (Quito) に首府がある赤道の共和国エクアドルから政治犯で追放された人たちであった。」(『ビーグル号航海記』)<sup>(5)</sup>

ガラパゴス諸島は、1535 年にスペイン人のパナマ司教フレイ・トマス・デ・ベルランガがパナマからペルーに向かう際に、風によって船が航路を外れたことで偶然に発見され、その後は、スペインの海賊そして、捕鯨業者によって食糧の供給地として利用されていた。

この太平洋に浮かぶ島々を発見し、「ガラパゴス」と呼んだのは、16 世紀のスペイン人である。ガラパゴスという名前は、これらの島々にいたゾウガメから付けられた。というのは、この諸島は、スペインの船乗りにとっては何よりもゾウガメの島であったからである。ダーウィンによれば、「森には野生のぶたや、やぎが多いが、主要な動物性の食糧はかめによって供給されていた」<sup>(6)</sup> のであり、ゾウガメは、かれらにとって貴重なタンパク源<sup>(7)</sup> であり、「以前は一隻の船で 700 匹を持ち去った」とダーウィンは記しているように、何万匹もが食糧として連れ去られた。

ゾウガメというくらいだから大きいという想像がつくが、どのくらい大きいかについてダーウィンは「私はおおきなかめ二匹に会った。各々少なくとも 200 ポンドの体重があったに相違ない」<sup>(8)</sup> と記している。200 ポンドというのは、約 90 キロだから確かに十分に大きい。このゾウガメのことをスペイン人は、その甲羅が馬の鞍 (galápago) に似ていることから「ガラパゴス」<sup>(9)</sup> と呼び、

この諸島はゾウガメが住んでいる島ということで、ガラパゴス諸島と呼ばれるようになったという訳である。

では、なぜスペイン人だったのか。それは、当時の世界の覇者がスペインであったからである。当時のスペインはハブスブルク家が支配するスペイン王国であり、「太陽の沈むことのない帝国」を築いていた。このガラパゴス諸島からさらに西進し、東南アジアの群島フィリピンも、スペイン人によって「発見」され植民地化されていた。スペイン王にして神聖ローマ皇帝に選出されたカルロス1世は当時のヨーロッパで最大の勢力を持ち、ヨーロッパ以外の広大な領土とあわせて、その繁栄は「太陽の沈むことのない帝国」と形容されるほどであった。ちなみに現在のフィリピン共和国やフィリピン諸島などの「フィリピン」という名称は、1542年、スペイン人のコンキスタドール<sup>(10)</sup>によってラス・フィリピナス諸島と命名されたことに起源を発する。これは、当時アストゥリアス公だったフェリペ、つまり、神聖ローマ皇帝カルロス一世の息子、後のフェリペ2世の名に由来するのである。スペイン王フェリペ2世(Philip 2 在位 1556-98)は、本国以外にネーデルランド、イタリア、新大陸を領有し、フィリピンを征服、オスマン・トルコから地中海覇権を奪い、ポルトガルを併合して「太陽の沈むことのない帝国」を樹立し、スペインの全盛期を築いたのである。

## 1.2 ガラパゴスを有名にしたビーグル号

このガラパゴスという名前を一躍有名にしたのは、ガラパゴス諸島の「発見」から300年後の1835年9月15日、ビーグル号でこの地にやってきて、博物学の調査を行ったチャールズ・ダーウィンである。

太平洋の孤島ともいべきガラパゴス諸島に、なぜダーウィンはやってきたのだろうか。それは、世界の覇者の交代を抜きには語れない。16世紀の世界の覇者はスペインであった。だからこそ、すでに見てきたようにこの諸島はガラパゴスと呼ばれていたのである。だが、18世紀の後半からイギリスがその地位を占めるようになった。イギリスは7年戦争<sup>(11)</sup>に勝つことで、アメリカ

とインドでの植民地獲得競争での勝利を確定的にし、「太陽の沈むことのない帝国」を実現していたのである。ダーウィンは、『ビーグル号航海記』の中で「この遠洋航海の目的は、1826年から1830年にかけてキング大佐によって着手されたパタゴニアとディエルラ・デル・フェゴとの測量を完成し、チリやペルーの海岸、その他太平洋中の諸島を測量し、世界を一周して時辰儀の測定の一連鎖を行うにあった」<sup>(12)</sup>と書いているように、ビーグル号はイギリス海軍の船であり、航海の目的は、スペインに代わって「太陽の沈むことのない帝国」となった大英帝国の海軍が使う海図の作成であった。艦長は、世界各地の、とりわけ南米の海岸線や港を測量する任務を担っていた。南米大陸から遠く離れたガラパゴス諸島もそうした調査区域のひとつだったのである。

ダーウィンは、その旅に博物学の資料収集のために同行していたのだが、彼はケンブリッジ大学を卒業したばかりの青年であった。彼は、行く先々で貴重な動植物や鉱物、化石を収集し、生物相や植生を観察した。ガラパゴス諸島にたどり着いた時には、プリマスを出港してからすでに4年が経っていた。絶海の孤群島であるガラパゴスの島々とそこで島ごとに独自の変種を示す生物の観察が、生物の多様性と環境に応じた適応についての、すなわち種の進化についての原初的なアイデアをダーウィンにもたらしたと言われている。

## 2 ウォーキング —パブリック・フットパスと囲い込み運動—

### 2.1 パブリック・フットパスと囲い込み運動

2013年の4月下旬、ダーウィンが40年住んだというダーウィンの邸宅ダウン・ハウスを見学するために出かけた。2013年の在外研究でロンドン大学に派遣されていた私と妻が住んでいたのは、ロンドン北部のバーネット区のフィンチェリー (Finchley)<sup>(13)</sup>という街である。郊外の住宅地であるが、大英博物館やロンドン大学があるワレンストリートの駅まで地下鉄のノーザンラインで20数分という、交通の便がいいところであった。註記に記しているように、フィンチェリーというのは、「フィンチ (日本名ひわ) という小鳥のいる森の

開拓地」という意味である。フィンチということで連想するのは、ガラパゴス諸島にいたフィンチの多様性もダーウィンに種の進化について思い至らせたものの一つであると言われている。どうでもいい小ネタであるが、何だか不思議な縁を感じてしまった。

午前10時半に、地下鉄のウェスト・フィンチェリーの駅を出発し、目的のダーウィン邸のダウン・ハウスに着いた時には、もう午後3時半を廻っていた。5時間もかかった。同じロンドンなのに、である。ノーザン・ラインでロンドン・ブリッジ駅まで行く。地下鉄から鉄道路線に乗り換えだが、時刻表やルートマップの見方が分からずロンドン・ブリッジ駅でも少しもたもたする。ホームによく辿り着き、入線した列車に乗り込んだら、11時46分発の急行列車だった。15分ほどで目的の駅チェルスフィールド（Chelsfield）の一つ手前の駅に着いた。Orpingtonである。駅員さんに「隣の駅に行きたいのだが」と尋ねたら、申し訳なさそうに「1時間に1本しか走っていない」と言われ、1時間ちかくも待ちぼうけを食らった。乗ったら3分ほどでチェルスフィールドの駅に着いた。

チェルスフィールドの駅から、ダーウィンが40年住んだというダウン・ハウスまでは、地図上の直線距離にすると約5キロである。そんなに遠い距離ではない。午後1時に歩き始めた。アップダウンのある住宅街を40分ほど歩き、ようやくのことでパブリック・フットパス（public footpath）の表示を見つける。表示に従い、木の門を通り抜け、牧場の中にはいって行く。踏み固められることで道であることがかろうじて分かるような牧場の中の道、つまり、フットパスを通り抜けていく。まさに他人の敷地をおじゃましていくのである。

ここで寄り道をして、このパブリック・フットパスとは何かについて考察しておこう。パブリック・フットパスというのは、私たち日本人にとっては、まったく馴染みのないものである。ウィキペディアを頼りに説明すると、パブリック・フットパスというのは、主に歩行者に通行権（right of way）が保証されている道<sup>(14)</sup>のことであり、イギリスで発祥した「歩くことを楽しむための道」のことである。農村部を中心に、イギリス国内を網の目のように走っている公

共の散歩道である。長いものは160キロメートルも続くという。ただし、通行が許可されるのは、その権利の行使が認められた特定の通路のみである。だからこそ、そこには、かならず標識がある。

なぜイギリスにおいてパブリック・フットパスがこのように発達し、その前提として通行権という権利が存在するのかについてももう少しきちんと理解するためには、おそらくイギリス近代の歴史を遡る必要があるだろう。

イギリスにおける近代化は、15世紀の「囲い込み運動」によって始まったと言われている。地主たちは、羊毛産業の興隆によって羊毛の価値が高まったので、それまで住んでいた小作農たちを村から暴力的に追い出した。そして、小作農たちによって耕されていた農地を囲い込み、そこに羊を放したのである。小作農からの地代よりも、羊毛の方が、ずっと利益が上がったからである。やがては自作農の土地をも奪い、農民が自由に入出りできる「開放地」や「共有地」(commons)をも囲いこんでいく。私的所有の権利の確立によって、土地が共有地の性格を失い私有地化していった<sup>(15)</sup>。

追い出された農民たちは、都市に流れ込むしかなかった。その流民を奴隷的な労働力として使うことで、近代産業のはしりである工場制手工業が生まれてくる。まさに近代資本主義は、農村貧民の血と汗と涙を吸って生まれてくるのである。その都市流民の悲惨さを目撃したトマス・モア<sup>(16)</sup>は、彼の代表作で

<b>16世紀</b> チューダー朝、絶対王政	・マンチェスターが中心の綿工業
・資本の原始蓄積過程	リヴァプールからマンチェスターへの運河
・第一次囲い込み運動	・運河マニア(熱)
・エリザベス救貧法	・七年戦争(1756-1763)
・リーズが中心の羊毛工業	↓
<b>17世紀</b> 市民革命	「太陽の沈むことのない帝国」
・ピューリタン革命(1642～1660)	<b>19世紀</b>
・名誉革命(1688年)	ヴィクトリア女王の時代 「世界の工場」
↓	・パックス・ブリタニカ(Pax Britanica)の出現
・議会主権の確立	・チャーチスト運動(参政権を求めて)
<b>18世紀</b> 市民社会の成立、産業革命	
・第二次囲い込み運動	

ある『ユートピア』の第一部で、イギリス社会の現実を痛烈に批判しているの  
であるが、囲い込みの実態を「羊が人間を食らう」という風にシュールに表現  
している。

「羊は非常におとなしく、また非常に小食だということになっておりま  
すが、今や [聞くところによると] 大食で乱暴になり始め、人間さえも食  
らい、畑、住居、町を荒廃、破壊するほどです。この王国で特に良質の、  
したがってより高価な羊毛ができる地方ではどこでも、貴族、ジェントル  
マン、そしてこれ（怠惰とぜいたく）以外の点では、聖人であらせられる  
何人かの修道院長さえもが、彼らの先代当時の土地収益や年収だけでは  
満足せず、また無為、優雅に暮らしても公共のために役立つことは皆無、  
いな、有害になるのではなければ飽き足りません。つまり残る耕作地を皆  
無にし、すべてを牧草地として囲い込み、住家をこわし、町を破壊し、羊  
小屋にする教会だけしか残しません。さらに、大庭園や獵場をつくるだけ  
であなた方の国土がまだ痛み足りなかったかのように、こういうえらいか  
たがたはすべての宅地と耕地を荒れ野 にしてしまいます。

ですから飽くことを知らない貪欲、祖国をむしばむおそろしい疫病でも  
あるような貪欲というあのひとりの男が、畑を合併して何千エーカーもあ  
る土地を一つの垣で囲い込むために、小作人は追い立てられるのです。彼  
らの中には財産を詐欺的手段で巻き上げられたり暴力的抑圧で没収されたり、  
うんざりする不当ないやがらせで売却を余儀なくされる人もいます。  
それゆえ、離散の状況はさまざまであっても、とにかく離村せねばならな  
いのが、この惨めな人々です。」（トマス・モア『ユートピア』<sup>(17)</sup>

18世紀になり、人口が増加し穀物価格が上がり始めると、議会の承認を得  
たいわゆる「議会制囲い込み」が盛んになる。1700年の段階では全国の耕地  
の半分以上しか囲い込まれていなかったのに、1820年頃になると、そのほと  
んどが囲い込まれ、開放地や共有地がほとんど消滅していた。今でもイギリス

の農園は、どこでもほとんど有刺鉄線が張り巡らされた生け垣や石垣で囲まれている。まさに囲い込みによって小作農を追い出した痕跡をとどめている。

だからこそ、囲い込まれた私有地を通行する権利が求められたのであろう。牧場などの私有地を突っ切るパブリック・フットパスは、公的権利あるいは公衆の権利 (public rights) としての通行権にその基礎をおいているのである。この通行権というのは、私有地である農場や自宅の敷地内を通り抜けたり、地権者が存在する土地を突っ切ったりなど、国有地・私有地の別なく人びとが通行することを認められている権利のことである。昔からその土地が公衆の通路として使われてきていて、現在も通路として使われているのであれば、誰もが自由にそこを引き続き使用し、通り抜ける権利があるという考えに基づくものであり、誰もが享受できてしかるべき基本的な権利であると捉えられているのである。

19世紀後半、このような囲い込まれた私有地に対して、公的な権利としての通行権を求める運動が起きた。その中心となったのが、政治家にして社会活動家であったエバースレイ卿 (Lord Eversley) である。彼は1865年に設立した「共有地保存協会」(The Commons Preservation Society) を設立し、協会の初代議長になった。45年間にも及ぶ議会闘争を行うことで、共有地 (commons)、森、歩道 (footpaths) に対する公衆の権利 (public rights) を法的に承認させることに、1910年に最終的に成功した<sup>(18)</sup>のである。

## 2.2 ダウン・ハウス (ダーウィン邸)

ウォーキングに戻ろう。パブリック・フットパスを通ってなだらかな上りの牧場を抜けていくとカッコーの森 (cuckoo wood) に入る。森といっても、榆 (elm) やブナ (beech) などの落葉広葉樹林なので明るい森である。牧場を通り抜けている時には強い風に悩まされていたが、この木々のおかげで風はほとんどなく、ぼかぼか陽気を楽しめた。イギリスに来て初めて T シャツ姿になったが、それでも汗ばむほどであった。日曜日の午後ということもあって散歩している親子連れ、大きな犬を連れているカップルなどに次々に会い、挨拶を交わす。

1時間半以上歩いたのだろうか、ようやく森を抜けて、自動車道にでる。自動車道の脇のフットパスをしばらく歩いてダウンの村に着いた。小集落があり、そこに小学校、パブ、雑貨店、レストラン、村の集会所（タウンホール）、そして、13世紀に建てられたというセント・メアリ教会<sup>(19)</sup>があった。その教会の壁面に日時計があり、その由来について、壁面に金文字で書かれたプレートが埋め込んであった。プレートに曰く、

「この日時計は、チャールズ・ダーウィン（1809-1882）を記念して作られたものである。彼は、ダウンで40年間暮らし働いた。ウェストミンスター寺院に埋葬されている。」

教会の近くが村の中心部だと思われ、数軒のパブやレストランと雑貨屋らしきものがあつた。ダーウィンもよく通つたという村のパブもあつたが、しかし、本当に数軒である。日曜日で、陽気も良かったこともあって車で出かけてくる人も多いのか、道は混んでいた。そして、この付近はどこも路上駐車車でいっぱいだった。

住宅が点在する小集落を抜けると、また牧場である。その牧場のパブリック・フットパスをしばらく歩くと、忽然とダーウィンが40年住んでいたというダウン・ハウスが現れる。それまでのこぢんまりとした家とは違い、断然別格の、広大な敷地と豪邸が出現する。行きの時には、探し探しなのでパブからダーウィン邸まで長く感じたが、帰りに測ったら10分ほどの距離であつた。これならダーウィンがよく通つたというのもうなずける。

ダウンという村は、今でこそグレーター・ロンドン（大ロンドン）の中に組み込まれ、ロンドンの一部であるが、ダーウィンの時代にはケント州の村である。通勤ということを考えるならば、今でも十分に不便であるから、当時ももっと不便だったはずである。ダーウィンは、ロンドンの煤と騒音が嫌で、ここに移り住んだということであるが、それが素直に頷けるような、まさに木々と緑、清澄な空気に恵まれたすばらしい環境である。ロンドンから来ると別天

地である。ダーウィンの邸宅の近くには、今でも住宅はなく、当然のことながら、静かな環境を保っている。

### 3 ダーウィン ー父と子ー

#### 3.1 ダーウィン家とウェッジウッド家

ダウン・ハウスの豪邸と広大な屋敷を購入した時のダーウィンは、弱冠 33 歳である。どうすれば 33 歳の若さでこれだけの豪邸を手に入れることができるのだろうか。もしも勤め先がロンドンにあったとすれば、通うにはあまりに不便な地である。そもそも何で生計を立てていたのだろうか、というような素朴な疑問が生まれた。この研究ノートの 3 つ目の嘶は、ダーウィンがどうして進化論の構想に至ったのかというような学問的な話ではなく、どうして、こういう豪邸と広大な屋敷を有することができたのかについて、瞥見することである。

チャールズ・ダーウィンは、裕福な、そして、何世代も前から科学に関心のある家柄にうまれた。父方の祖父エラズマス・ダーウィン (1731 - 1802) は、イングランド中部の町リッチフィールドで成功をおさめた裕福な医師だった。彼は、化石と博物学に興味をもち、なかでも植物学を得意とした。そしてその研究の成果から、地球上のすべての生き物は互いに関係しあい、すべてがひとつの源から発していると信じるようになる。つまり、種は進化してきたという考えを提唱していた<sup>(20)</sup>。祖父は、医師であり学者であっただけでなく、実業家でもあった。祖父のエラズマス・ダーウィンが活躍した 18 世紀中葉は、イギリスが産業革命に突入した時であり、産業革命による大量生産品を輸送するための運河建設ラッシュが起きていた。祖父のエラズマスも急速に発展しつつあったイングランド中部の工業地域において新しい運河を建設<sup>(21)</sup>しようと奔走していたが、そこで、一代で製陶業で世界的に有名なウェッジウッド社を育て上げたジョサイア・ウェッジウッド<sup>(22)</sup>(1730-1795、母方の祖父)と出会い、意気投合する。ジョサイア・ウェッジウッドは、初代商工会議所会頭を務めている。祖父のエラズマスは、ウェッジウッドの工場の改良を手がけたりなどし

た。しばらくするうちに、ふたりは互いの家をちょくちょく訪ね会うほどの仲になり、その友情がきっかけで生まれたダーウィン家とウェッジウッド家のつながりは、その後も続く深い絆に育っていく。ダーウィンの父ロバートが誕生したのは、ちょうど祖父のエラズマスとウェッジウッドの創始者ジョザイアが、親しく交わり始めた1766年のことである。そしてその30年後に、ダーウィンの父ロバート（1766-1848）は、ジョザイアの娘スザンナ（1764-1817）と結婚したのである。

### 3.2 ダーウィンの生い立ち

父のロバートと母のスザンナは、ダーウィン家とウェッジウッド家のどちらからも遠くないシュルーズベリー<sup>(23)</sup>の町で「ザ・マウント」と呼ばれる大きな家に落ち着く。父ロバートも祖父エラズマスと同じく開業医として成功をおさめていた。夫妻は4人の娘と2人の息子に恵まれた。チャールズ・ロバート・ダーウィンは、1809年2月12日、ダーウィン家とウェッジウッド家の血筋を引く次男として生まれた。兄は祖父の名をとってエラズマス、弟はチャールズと名付けられている。

シュルーズベリーは、イングランド西部ウェスト・ミッドランズ地方にある中世都市である。11世紀に作られたシュルーズベリー城や、小説『修道士カドフェル』で有名な僧院（Abbey）があり、都市城壁内には、15～16世紀の木造家屋やステンド・グラスで知られるセント・メアリア教会など歴史的建築物が多い。旧市街は、遊歩道が整備されており、ケンブリッジに似た雰囲気落ち着いた古都という感じの観光都市である。

ダーウィンが生まれたのは、旧市街の外、セヴァン川を渡った郊外の「ザ・マウント」という大邸宅である。現在は、周りは住宅地になっていて緑は少なくなっているが、ダーウィンが生まれた当時は、緑豊かな野原に立つ大きな建物だったのである。

8歳の時に母親が死に、ダーウィンは兄と同じ私立の寄宿学校シュルーズベリー校<sup>(24)</sup>に入学する。7年間、この学校の寄宿生として過ごす、成績はこ

く普通であった。

「学校生活の後半に私は射撃に熱中した。どんな神聖なことにたいしてであれ、私が鳥を射つのに示したほどの熱意をもちえたものが他にいようとは信じられない。はじめてシギを殺したときのことを、私はなんとよく覚えていることか。そのときはすっかり興奮してしまって、手が震えて銃にまたたまをこめるのが、困難なほどであった。この趣味は長く続き、私はかなりの射撃手となった。」(『ダーウィン自伝』)<sup>(25)</sup>

父は息子が狩りに興じる怠け者に育つことを恐れていた。「私には学校があまりためにならなかったので、父は賢明にも普通より早く学校をやめさせ、兄と一緒にエディンバラ大学へやった。」<sup>(26)</sup>つまり、予定より2年早く、シュルーズベリー校をやめさせ、16歳のダーウィンに医師になるように告げ、スコットランドにあるエディンバラ大学に入学させた。父も祖父も、かつて同じ大学に学んでいたからである。ダーウィンにとっても、兄が医学の勉強の仕上げにケンブリッジ大学をやめ、一緒にエディンバラ大学に行くことなり、そのことを何よりも喜んでいた。

### 3.3 エディンバラ大学

1825年10月、ふたりの若者はエディンバラに到着した。エディンバラは、スコットランドの政治の中心地であるだけでなく文化の中心地であり、当時、古代ギリシアの学問や文化の中心地として栄えていた古代のアテナイになぞらえて「北のアテネ」と呼ばれていた。というのは、イングランドに比べて、自由な思想や新しい着想に寛大な雰囲気があり、18世紀の「スコットランド啓蒙」に代表されるように、ヒュームやアダム・スミスなどの学者を輩出し、その自由な気風は、世界中から留学生を招き寄せていたからである。

イングランドの2つの大学、ケンブリッジ大学やオックスフォード大学では、学生も教師も、国教であるイギリス国教会への信仰を明らかにしなければなら

なかった。イギリス国教会は、イギリスの君主制を支える柱のひとつであっただけでなく、社会をまとめる大きな力になっていた。ケンブリッジ大学やオックスフォード大学では、人々が地球の年齢や生き物の歴史についてあれこれ思い巡らすことに教会が反対し、それは科学ではなくて聖書できちんと説明されていると主張していたのである。

これに対してスコットランドでは、イギリス国教会ではなく長老派が強かった。そのこともあって知的生活が宗教によって支配されているということにはなかった。自由な発想にみちたエディンバラの地では、地球について知ろうとする地質学と生命の謎を解き明かそうとする生物学が盛んに研究されていた。イギリス全土、ヨーロッパ、さらにアメリカから、医師、文筆家、哲学者、博物学者がエディンバラに集まってきていたのである。ダーウィンもエディンバラ大学では、医学よりも地質学や生物学に関心をもち熱心に学んだという。

医学を学ぶためにエディンバラ大学に進学したダーウィンであったが、医者になるためには避けて通ることができない手術が大の苦手であった。

「私はまた、エディンバラで病院の手術教室に2回出席し、2つのずいぶんひどい手術を見たことがあった。その1つは子どもの手術だったが、私はどちらの場合も手術が終わらないうちに早々に逃げ出してしまった。それ以来、私は二度と出席しなかった。...この2人の患者は、ほんとうに長い間絶えず心に浮かんで私を悩ませた。」<sup>(27)</sup>

当時はまだ痛みを和らげる麻酔がなく、手術するには患者をベッドにしぼりつけるしかなかった。ほとんどの場合は意識があって怯える患者の近くには、血を吸い取るためにバケツいっぱいのおがくずが用意されていた。医学部の学生には手術の見学が義務付けられていたが、ダーウィンは流れる血と患者の悲鳴に耐えることができなかったのだ。2回までは努力したものの、ぞっとするような子供の手術を目の前にしてとうとう逃げ出し、それっきり手術室に姿を見せることはなかった。ダーウィンが医学の勉強をやめた直接的な理由はこれ

であろう。と同時に、次のようなことも医学から離れる動機になった。

「この時期のすぐ後で私はいろいろのちょっとした事情から、父が私にかなり裕福に暮らしていけるに十分な財産を残してくれるらしいことが確かであると信じるようになった。... この確信だけでも、医学の勉強に専心する努力を妨げるにたりるものであった。」(『ダーウィン自伝』)<sup>(28)</sup>

ここでダーウィンが「ちょっとした事情」と書いているのは、父が土地投機で大儲けをしており、その父から相当の遺産をもらえることが分かったということである。働かないだけでも暮らしていけるだけの十分な財産をもらえることが分かり、それは取りも直さず医師として生計を立てる必要がないということであった。家業であった医者になるための医学の魅力はますます薄れた。エディンバラでの2年目には医学よりも博物学の勉強にエネルギーをそそぐようになり、とうとう3年目には、エディンバラ大学にもどらなかった。

### 3.4 ケンブリッジ大学

父ロバートは、ダーウィンが医師になりたがっていないのに気づいていた。しかし、息子には何らかの社会的地位が必要だとも感じていた。

「父は、私が医者になりたいと思っていないということに、自分できづいたか、あるいは姉たちから聞いたかして、私に牧師になってはどうかと勧めた。当然のことながら父は私が怠惰な狩猟まじがいになることに強く反対していた。」(『ダーウィン自伝』)<sup>(29)</sup>

そこで、ケンブリッジ大学のクライスト・カレッジ (Christ's College) に進学させた。当時は、イギリス国教会の牧師になれば人々から尊敬され、安定した生き方ができたからである。1860年代には『種の起源』を出し、進化論を唱えたことで教会と対立することになる<sup>(30)</sup>が、1827年の時点では、ダーウィンは、

父親の決めた新しい計画に喜んで従った<sup>(31)</sup>。とりわけ信仰心が強かった訳ではなく、ただ田舎の牧師になれば暇な時間がたっぷりできて、博物学の研究を続けられると思っていたからである。実際、そのころの一流の博物学者たちには牧師が多かった<sup>(32)</sup>。科学者はまだ独立した知的職業とは認められてはおらず、科学の研究だけで生計を立てるのはほとんど無理だったからである。

ケンブリッジでは、植物学教授のジョン・スティーブンズ・ヘンズロー（John Stevens Henslow, 1796-1861）と地質学教授のアダム・セジウィック（Adam Sedgwick, 1785-1873）という、二人の牧師兼科学者と知りあった。

「私は自分の一生の経歴に他のなにごとにもまして大きな影響を与えた一つの事情について、まだ述べてこなかった。それはヘンズロー教授との親交である。... ケンブリッジ在学中の後半にはずっと、ほとんど毎日かれと長時間散歩をした。そのため、私は、ある教授たちから「ヘンズローと散歩する男」と呼ばれたくらいである。晩にはいつもよく教授の家族の夕食に招待された。教授の博識は植物学、昆虫学、化学、鉱物学、地質学にわたっていた。」（『ダーウィン自伝』<sup>(33)</sup>）

苦手なラテン語とギリシア語は、家庭教師を雇って乗り切った。卒業できるかどうか心配していたが、猛勉強のかいがあって、1831年1月の卒業試験では、178人中10位というきわめて優秀な成績<sup>(34)</sup>だった。

### 3.5 ビーグル号での航海

卒業した年の1831年8月29日、ダーウィンのもとに人生を変える一通の手紙が舞い込んだ。ケンブリッジ大学のヘンズロー教授からだった。それは、「フィッツ・ロイ艦長がビーグル号の航海に博物学者として報酬なしで同行することを志願する青年があれば、それがだれであろうと自分の船室の一部を喜んで提供しようと言っていることを、知らせるもの」<sup>(35)</sup>であった。つまり、イギリス海軍の所有するビーグル号が、海岸線を測量するために南米に派遣され

ることになったのだ。船は測量を終えてから、太平洋とインド洋を經由してイギリスに戻るようになっていた。ビーグル号<sup>(36)</sup>の艦長で26歳のフィッツ・ロイは、3年にわたる航海中の話し相手をほしがっていたのだ。というのは、その頃の海軍のしきたりで、艦長は船員と親しくしていけなかったからである。その役目を引き受けた人は、世界のあちこちで博物学の調査研究をするまたとない機会を手に入れることができるという話を耳にしたヘンズロー教授が、ダーウィンを推薦してくれたという訳である。

しかし、ダーウィンの父は、いろんな理由を挙げてこの計画に反対した。これまでのことを考えると、親としては当然の反応であろう。自伝で次のように書いている。

「ここには、私はたちまちその申し出を受けたいと夢中になってしまったが、父が強硬に反対したということだけを、言っておこう。ただ私にとって幸運だったのは、父がつぎのように言い足したことである。『もしも良識があっても前に行くようにすすめる人を、お前が見つけてくれたら、私も同意することにしよう。』」(『ダーウィン自伝』)<sup>(37)</sup>

この時、ダーウィンは、大学を卒業したばかりの22歳の青年である。医者の道に挫折したからこそ、イギリス国教会の牧師になるためにケンブリッジ大学のクライスト・カレッジで神学を学び、学位をとったのである。ダーウィン自身も自伝で「牧師になることがきまったので、私はイギリスの大学のどこかに入り、学位を取ることが必要になった」<sup>(38)</sup>と述べている。何とかケンブリッジ大学を卒業し学位をとったのに、つまり、牧師になる準備が整ったのに、ビーグル号で博物学者として世界一周の旅に出たいと言う息子に対して、両手を挙げて賛成ということはありませんだろう。航海は無給であるだけでなく、博物学の調査に必要な装備一式と食費<sup>(39)</sup>は個人負担であり、膨大な費用がかかるのだ。親として反対するのは当然であろう。父の常識的かつ合理的な反対理由は、ダーウィンのまとめによれば8つ<sup>(40)</sup>であり、反対理由の第一番目が、「将

来の聖職者としての私の性格にたいして悪い評判がたつこと」<sup>(41)</sup>であった。さすがのダーウィンも諦めて、「その晩に手紙を書いて、その申し出を断っ」<sup>(42)</sup>ている。父から完膚なきまでに論破されて、航海の夢を諦めて、断りの手紙を書いているのだ。

ではなぜダーウィンは、ビーグル号に乗ることに出来たのだろうか。そこには、親しいつきあいをしていたウェッジウッド家の存在があった。すなわち製陶会社ウェッジウッドの二代目社長であり、母親の弟で、ダーウィンの叔父さんにあたるジョサイア・ウェッジウッド二世<sup>(43)</sup>とその家族の存在があった。それに加えて、父の強硬な反対意見の最後に付け加えた、救いの一言も大きかった。父は、ダーウィンが反論できないほど完璧にねじ伏せているが、その最後に次のように付け加えたのである。「もしも良識があってしかもお前に行くようにすすめる人を、お前が見つけてこられたら、私も同意することにしよう。」子どもにとっての「逃げ道」あるいは「希望」を残していたのである。

時系列順に見ていくと、8月29日にヘンズロー教授からの手紙が届き、ダーウィン自身は行きたいと思っていたが、翌30日に父親から反駁され、その夜に断りの手紙を書いている。そして、31日に親しいつきあいをしていた叔父の一家が住むメアに出かけている。

「8月の最後の日に私は、メアへ行った。そこですぐにすっかり様子がちがってしまった。私は、その家族の全員がたいへん強力に私の味方であることを知り、もう一度努力することにした。その夕方、私は父の反対意見を表に書き上げ、ジョス叔父がそれに対するかれの意見と答を書いた。これを私たちは翌朝早くシュルーズベリーへ送り、私は獵に出かけた。」  
（『ビーグル号航海記』の草稿）<sup>(44)</sup>

叔父の一家が住むメアは、シュルーズベリーからわずか20マイル（約32キロ）の道のりで、シュロプシャーの中心にあった。ウェッジウッド家のみんなは、彼が航海に行くことに賛成してくれていたのだ。そこでダーウィンは、父

の反対意見をまとめて叔父のジョサイア・ウェッジウッド二世に渡し、彼がそれに一つ一つ丁寧な反論を書いてくれたのである。要するに、父親としての心配は分かるが、それは杞憂にすぎないし、航海は、将来のダーウィンの役に立つにちがいないということを書いてくれたのだ。父の反対意見をまとめたものと、それに対する叔父からの反論のメモを同封して父のもとに手紙を届けた。その手紙の一部を抜き出して置く。

「考えてみると、父上は、航海の申し出についての私の意見をもう一度申し上げることを許してくださるだろうと思います。私の口実と理由は、ウェッジウッド家のみんなはその問題について、父上や姉さんたちとは違った見方をしているということです。

私はジョス叔父さんに父上の反対意見を正確で完全だと私が確信する表にして渡しました。叔父さんは親切に、そのすべてについて自分の意見を述べてくれました。その表と叔父さんの考えを同封します。父上の厚意におすがりすることをお願いできるとすれば、もし、父上が決定的な返事—可または否—を下さるならこの上なくありがたく思います。後者であった場合、もしも私が、父上のよりよい判断と、これまでの私の全生活を通して示してくださっていたとても親切な寛容とに、無条件に服さないとしたら、私はもっとも恩知らずな者になるでしょう。

私が二度とこのことを持ち出さないと思ってくださって大丈夫です。」  
(1831年8月31日メアにて)<sup>(45)</sup>

この手紙はメアに着いた当日の夜に書かれたものである。一度は父の反対に屈してビーグル号に乗ることを諦めていたのだが、いとこたちのいるメアのウェッジウッド家では彼を応援してくれていることに励まされ、再び父親を説得しようと手紙を書いたのだ。もちろん、父からも「もしも良識があってしかもお前に行くようにすすめる人を、お前が見つけてこられたら、私も同意することにしよう」という言葉をもらっていたことも、頼み込む勇気を与えたので

はないだろうか。一度は諦めた「夢」ではあるが、そこですねたりしないきちんと父親に頼み込んでいる。それも凛とした文を書いている。親子関係ではとかく甘えが発生しやすく、だからこそ自分の希望が通らないとですねたり腐ったりしがちである。そういう様子が、この親子には微塵も見えないのはすごいことである。

ダーウィンは、手紙を出した後で大好きな猟に出かけていた。叔父のウェッジウッド二世は、前日に甥のダーウィンのために反論のメモを書いたのだが、それだけでは不十分だと思ったのだろう、猟に出ているダーウィンを呼び戻し、ダーウィンの父を説得するために実家のシュルーズベリーと一緒に出かけてくれた。ウェッジウッド二世は、父ロバートの亡き妻の弟であり、父から常に「世界中で一番分別に富んだ人間の一人」として一目置かれていた。そのウェッジウッド二世が賛成していることを知った父は、約束通りにビーグル号に乗り込むことに対して「ただちにきわめておだやかな態度で同意し」<sup>(46)</sup>、博物学的調査に必要な支度金を用意してくれたのである。

『ビーグル号航海記』と『種の起源』で、ガラパゴスの名とダーウィンの名が広く知られているので、5年間をかけてのビーグル号での世界一周の旅の主役はダーウィンであったかのようなイメージをもちやすい。だが、すでに見てきたことから明らかなように、実際のところダーウィンは、海軍の測量船に私的に同乗した一青年にすぎない。ダーウィンはビーグル号の博物学者と呼ばれることもあるが、正確に言うとそれも正しくない。ダーウィンに正式な身分はなかった。ビーグル号での彼の立場は、19世紀初頭の科学が、主に裕福な紳士たちの素人の娯楽だったことをあらわす良い例なのである。ダーウィンは、船長の話し相手としての一民間人にすぎなかった。ダーウィンは、『ビーグル号航海記』の「はしがき」で次のように船長に対する謝辞を述べている。

「軍艦ビーグル号に科学者を便乗させ、それに付帯して、その科学者のために、自身の生活施設の一部を提供することを発表されたのは、同艦の艦長フィッツ・ロイ（Fitz Roy）大佐の発意の結果であったことと、私が

その科学者としての勤務を志願して、水路官ビューフォート（Beaufort）大佐の好意によって海軍省の採用を得たことは、この著書の第一版の「はしがき」に、また『ビーグル号の航海における動物学』（Zoology of the Beagle）にも記しておいてある。」（『ビーグル号航海記』）<sup>(47)</sup>

ビーグル号は、予定より2年遅く、5年間の世界一周の航海を終えて、1836年10月2日無事に帰投した。27歳になっていた。その時には、ダーウィンはすでに博物学者の仲間の間では名声を得ていた。というのは、何年もかけて植物学者のヘンズロー教授に送っていた化石や標本や手紙の一部を、彼が博物学者仲間へ回覧していたからである。牧師になる計画はいつの間にか立ち消えになった。父ロバートは、息子が博物学に専念できるだけの十分な資金を用意してくれた。

『ビーグル号航海の動物学』の出版に対しては、政府から助成金をもらうことができた。ダーウィンは航海で集めた標本をもとに研究していた博物学者たちの論文を、ダーウィン自身が編集して本にするもので、5巻の大著になる予定であった。さらにダーウィン自身も航海の体験を本にまとめたいと思っていた。そこで、シュルーズベリーとケンブリッジで数ヶ月をすごしたのち、学会にも博物学者仲間にも近い場所がいいからと、ロンドンに部屋を借り、仕事に着手した。

### 3.6 結婚、そしてダウン・ハウスへの転居

いくら夢中になれる仕事があり、社交生活が忙しくても、ダーウィンはなんとなく寂しさを隠せなくなった。そのため、1838年、30歳になる頃には結婚を考えるようになった。

ダーウィンは、結婚生活の是非について分析的に考えたと言われている。最終的には長所が短所にまさり、従姉妹のエマ・ウェッジウッド（1808-1896）に求婚した。1839年1月に結婚。似合いのカップルで、エマは朗らかで愛情深く、あれこれ夫の世話をやくのを楽しんだ<sup>(49)</sup>。ジョザイア・ウェッジウッ

ド二世はこの結婚にあたって、娘のために多額の持参金を用意し、父ロバート・ダーウィンも十分な財産を与えたので、ダーウィン一家に経済的な心配はまったくなかった。ダーウィンは家計のために働く必要はなかったばかりか、投資によってさらに裕福になっていたのである。

エマとの新婚生活はロンドンの借家で始まった。ダーウィン一家が住んでいた建物は、現在はロンドン大学 UCL が購入し、そこをダーウィン館<sup>(48)</sup>にしている。ただそこに住んでいたということだけで、彼の名前と写真を使っているというのは、ダーウィンがイギリスにおいてそれだけの商品価値があるということだろう。しかし、ダーウィンはロンドンが大嫌いで、煤の汚れと霧で黒ずんだ街はまるで「太陽の死」を悼んでいるようだと言っている。1842年、ダーウィンはロンドンを引き払うことに決め、ケント州の田園地帯の村ダウンに、ダウン・ハウスという名の屋敷を買った。ダウン・ハウスは広大な庭を備えた堂々たる豪邸である。街と煤ではなく、木々と花々で囲まれた新しい家はすばらしかった。屋敷は広大で、増え続ける家族<sup>(50)</sup>の他に多くの召使いたちが暮らせるだけの十分な余裕があった。

ビーグル号の航海から戻ったダーウィンは、二度とイングランドの地を離れることはなかった。そもそもほとんどダウン・ハウスを離れることがなかった。国内はもとより海外からも多くの研究者が彼に会いに来たのであり、手紙を送ってきたのだ。19世紀の博物学者たちの多くは、辺境の危険な地域まで苦労して調査旅行にでかけていたが、ダーウィンは国内で快適に暮らしながら静かに考え、書く仕事に専念した。終生職に就くことがなく、ダウン・ハウスを拠点にして世界中の専門家あるいはアマチュアの博物学者と手紙のやり取り<sup>(51)</sup>をして情報を集め、自身でも機材を取り寄せて実験観察を行なった。

ダーウィンが、進化論を思いつき、それを著作にまとめることができたのは、もちろん、彼の才能に負うのは言うまでもない。しかし、ダーウィンを一流の博物学者にするのに与って力があつたと思われるのは、母亡き後ひとりで子供の面倒をみていた父親である。父のロバートは、ダーウィンを家業でもある医者にするためにエディンバラ大学へ行かせている。そこで挫折したら牧師にな

るための勉強をケンブリッジ大学でさせている。もちろんこのようなパターナリスティックな父ロバートの振る舞いは、周りからは、「支配的な人格」<sup>(52)</sup>あるいは「暴君」<sup>(53)</sup>と見られ、ダーウィンが「ヴィクトリア時代の著名人の中で一番病弱」と言われるほど生涯病気に苦しめられた原因のひとつだという解釈もある。しかし、ビーグル号航海の話が来た時には反対しているが、すでに見てきたようにちゃんと逃げ道というか救いの道も用意している。そして、一度同意した後は、十分なお金を渡してビーグル号での博物調査に赴かせている。帰国後は、牧師の道に拘泥せず、彼の研究を金銭的に全面的にバックアップした。そればかりでなく、「煤煙と騒音にまみれたロンドンが嫌だ」と贅沢を言って郊外に引っ越すにあたっては、豪邸を購入し、一生働かなくていいだけの生前贈与を行なっているのである。ダーウィンの進化論の「発見」という偉業の陰には、この父親の深い愛情と配慮があったことも見逃すことができないのではないだろうか。

## 結びに代えて

世界中で生まれ、今も読まれている『ビーグル号航海記』が出版されたのは、航海から戻って3年目の1839年のことであるが、地質学についての一連の本が完成するには、さらなる時間を要した。1846年10月、ダーウィンの生涯にわたるよき友であり、指導者であったヘンズローに宛てて「ビーグル号で集めた資料に関するすべての仕事をおえ、わたしがどれほど喜んでいるか想像もつかないでしょう」と書いている。5年間の航海の結果を発表するのに10年の歳月が流れていた。そして、さらに航海から23年後、1859年50歳の時、進化論についてまとめた『種の起源』を発刊した。

『種の起源』は、西洋の精神にとってエポックメイキングな事件であった。ただ、進化論自体はダーウィンの独創ではなく、フランスの博物学者ラマルク(1744 - 1829)や、ダーウィンの祖父エラズマス・ダーウィン、またモンテスキューやディドロなどの18世紀の哲学者たちによっても考えられていた。

ダーウィンの偉業は、進化論を自然淘汰説というのちの生物学のパラダイムを規定する理論によって論理的に説明したことにある。当時のイギリスは、産業革命を完遂させ、大英帝国華やかかなりしヴィクトリア時代であったが、しかし、社会的にはイギリス国教会の影響力が未だ強く、それは自然科学にも及んでいた。特に生物学では、すべての生物は神が個別に創造し、そして種は不変であるという創造説が幅を利かせていたのである。自然淘汰による生物の進化という理論は、創造という神学的な絶対真理をくつがえすものであり、言い換えれば、神学に対する、自然科学としての生物学の独立戦争であった。『種の起源』は、ニーチェが『ツァラトゥストラは、かく語りき』の中で、神の死を宣告する四半世紀前に書かれた神に対する自然科学の「独立宣言」であり、科学の世界のみならず社会的・文化的にその後の西洋精神を決定的に規定するものとなった。そのことによって、ダーウィンとガラパゴスの名は、西洋精神史に永遠に刻み込まれたのである。

1882年4月19日にダウン村の自宅で死去。ダーウィンの自然淘汰説は、神による世界創造を信奉する国教会の聖職者や科学者から激しく攻撃されたにもかかわらず、多くの国王や女王、桂冠詩人やニュートンらが眠り、歴代国王の戴冠式が行なわれる、ウェストミンスター寺院に埋葬された<sup>54)</sup>。フッカー、ハクスリー<sup>55)</sup>、ラボックといった友人たち、ロイヤル・アカデミー会長ウィリアム・スポティスウッド、フランシス・ゴルトンらが、科学の優位性を一般の人々に印象づける好機と見なして家族を説得し、報道機関に記事を書かせ、王室と教会、そして議会に働きかけたのが功を奏したのだった。ダーウィンは、同年4月26日、国葬に付された。ダーウィン自身は、73歳で亡くなるまでの40年間を過ごしたダウンの村に埋葬されることを望んでいた、と伝えられている。

ダーウィン夫人のエマは、夫の死後、息子がケンブリッジ大学教授をしていたので、現在はダーウィン・カレッジになっている屋敷に移り住んだ。しかしながら、1896年88歳で亡くなると、おそらく彼女の希望だと思うが、ダウン村のセント・メアリ教会に埋葬されている（了）

## 注

- (1) 1位はチャーチル, 2位エンジニアのブルネル, 3位ダイアナ妃, 5位シェークスピア, 6位ニュートン, 7位エリザベス1世, 8位ジョン・レノン, 9位ネルソン提督, 10位クロムウェル。
- (2) 同年同月日生まれの有名人として, アメリカの大統領のリンカーン (Abraham Lincoln, 1865年4月15日暗殺) がいる。
- (3) Down というのは, up,down (上, 下) の「下」という意味ではなく, 古英語の「丘」に由来している。ロンドン近くの石灰岩層には, North Down と South Down があり, ダーウィンが住んでいた村 Downe は, ロンドン南部に広がる North Down の一部であり, その他にツゲの自生地 Box Hill や東にたどるとドーヴァー海峡に出て, 海岸には有名な白亜の断崖ホワイト・クリフがある。ダーウィンが住んだダウン (Downe) の村の名は, もともとは Down だったようだが, スコットランドにある同じ名前の村と区別するために e をつけ足して, Downe としたということである。この村は, 現在, 1965年にケント州からグレーター・ロンドンの一部に組み込まれ, ブロムリー自治区の村となっている。
- (4) ガラパゴス諸島は, 1535年にスペイン人のパナマ司教フレイ・トマス・デ・ベルランガがパナマからペルーに向かう際に, 凧によって船が航路を外れたことで偶然に発見された。エクアドルとは, スペイン語の赤道 (the equator) の意味。およそ300年後の1832年にエクアドルが領有を宣言し, 入植を開始した。その3年後の1835年にビーグル号が, この島にやって来たのである。
- (5) ダーウィン『ビーグル号航海記 下』(島地威雄訳, 岩波文庫(岩波書店), 1961年), 12頁。
- (6) 同書, 12頁。
- (7) ダーウィンもそのことに触れている。「森には野生のぶたや, やぎが多いが, 主要な動物性の食糧はかめによって供給されていた。かめの数はもちろん, この島では非常に少なくなった。」(『ビーグル号航海記 下』, 同頁)。
- (8) 『ビーグル号航海記 下』, 前掲書, 11頁。
- (9) ガラパゴスという名は, スペイン語で馬の鞍を意味する galápagos からきている。ゾウガメの甲羅が馬の鞍に似ているからである。
- (10) スペイン語で「征服者」を意味し, とくに15世紀から17世紀にかけてのスペインのアメリカ大陸征服者のこと。
- (11) イギリスの世界覇権は, オランダに対しては17世紀後半に3次にわたる英蘭戦争を戦って勝利し, フランスに対しては17世紀後半から19世紀初めにかけて

ダーウィンをめぐる三題断（的射場）

てファルツ継承戦争（北米ではウィリアム王戦争）、スペイン継承戦争（北米ではアン女王戦争）、オーストリア継承戦争（北米ではジョージ王戦争）、7年戦争（北米ではフレンチ・インディアン戦争、1756-1763年）のヨーロッパ・北米の両大陸にまたがる一連の戦争で勝利することで、確定した。

- (12) ダーウィン『ビーグル号航海記 上』（島地威雄訳、岩波文庫（岩波書店）、1959年）、19－20頁。
- (13) finchley という語の初出は、finchelee-leya (c.1208) であり、その語義は、'the clearing in the forest with the finches' つまり「フィンチという小鳥のいる森の開拓地」である。ということで、フィンチェリーというのは、ダーウィンと縁のある地名である。なぜならば、ダーウィンは、「一般にはガラパゴス諸島でダーウィン・フィンチ (Darwin's finches) の多様性から進化論のヒントを得た」と言われているからである。
- (14) "In England and Wales a public footpath is a path on which the public have a legally protected right to travel on foot. Public footpaths often form a dense network of short paths, offering a choice of routes to many different destinations. It is probable that most footpaths in the countryside are hundreds of years old or more." (Wikipedia)
- (15) 「領主の囲い込みが、15世紀半ばから始まった。これを推進したものは、国王・貴族・修道院以外にジェントルマンが多数を占めた。彼らは、直営地からはじめて、農民保有地を囲い込み、そして、それは共有地にまでおよび、大規模な牧羊業をはじめた。当時の農業技術では大きな囲い込み地を耕地として耕作することは難しかったが、牧羊業は特別の技術を必要とせず、かつ「従来 200名いた農場が、2,3名の牧羊夫」でこと足りたから、領主には格好の産業となった。しかも当時イギリス国内では毛織物工業が発展し、羊毛に対する需要が増大しつつあった。」大野真弓編著『イギリス史（新版）』（山川出版社、1975年）、115頁。
- (16) トマス・モア (Thomas More, 1478-1535) は、チューダー朝の法律家であり思想家である。1515年からイングランド王ヘンリー8世に仕え、1529年、官僚で最高位の大法官に就任した。ヘンリー8世が離婚問題からローマ教皇クレメンツ7世と反目すると、大法官を辞任。ヘンリー8世の側近トマス・クロムウェルが主導した1534年の、国王をイングランド国教会の長とする国王至上法にカトリック信徒の立場から反対した。このことにより査問委員会にかけられ反逆罪とされ、1535年7月6日に斬首刑に処された。
- (17) トマス・モア『ユートピア』（澤田昭夫訳、中央公論社、1993年）、74～75頁。

アメリカ・ヴェスプッチがカナリア諸島からアメリカ大陸までを旅行した記録『新世界』を深い関心を持って読んだモアは、ラテン語で『ユートピア』を執筆し、1516年に刊行している。ユートピア (Utopia) とは、「どこにも無い」という意味の言葉で、ヒュトログエウスなる人物の見聞を聞く、という設定で、第1巻でイギリスの現状を痛烈し批判し、第2巻で赤道の南にあるというユートピア国の制度・習慣を描いている。

- (18) George Shaw-Lefevre Eversley, *Commons, Forests and Footpaths: The Story of the Battle during the Last Forty-five Years for Public Right over Commons, Forests and Footpaths of England and Wales* (London: Cassell and Company, 1910, rep. by Kessinger Publishing).
- (19) セント・メアリ教会 (St Mary the Virgin) は、13世紀の建立になるということであったが、フィンチェリーのセント・メアリ教会も13世紀に建てられている。スタンドグラスで有名な、ダーウィンの生家があるシュールベリーのセント・メアリ教会は、10世紀にイングランド王によって建てられたということであり、ヘンリー8世時代の庶民院議長夫妻がウェストミンスター寺院のように寝姿で安置されていた。
- (20) 祖父エラズマス・ダーウィンは、医者であると同時に、発明家であり、投機家であった。そして、ロイヤル・アカデミーの会員である博物学者であり、『植物園』(1790年)、『ズーノミアー生物の法則』(1794 - 96年)、『自然の殿堂』(1803年)という一連の博物学の本を書いている。
- (21) 「1777年には、リヴァプール・ハル間のグランド＝トランク運河、リヴァプールとセヴァン河を通じるコヴェントリー運河、1793年には、バーミンガムとロンドンを連絡するバーミンガム運河、ヨークシャーとランカシャーを通じる運河が開削された。この運河時代に議会によって認可された運河は156本、その延長は2896マイルに及び、その総費用は1100万ポンドに達した。特に1791年から1794年に至る時期は、運河熱が盛んで運河狂時代と言われている。この水路の発達が発達産業革命時代の運輸交通に非常な便宜を与えた。」(大野真弓編著『イギリス史(新版)』, 202頁。)
- (22) ジョザイア・ウェッジウッドは、イングランド、スタフォードシャー州ストーク・オン・トレントのバーズレムで代々作陶に携わってきた陶器職人の家に生まれる。イギリスの陶芸家、事業家であり、イギリス最大の陶器メーカー「ウェッジウッド社」の創設者である。後にイギリス陶芸の父と称される。窯の中の温度を測るパイロメーター(高温測定計)を発明し、ロイヤル・アカデミーの会

ダーウィンをめぐる三題噺 (的射場)

員にも選ばれた科学者としての一面もある。

- (23) ダーウィンが生まれたシュルーズベリーは、イングランド西部ウェスト・ミッドランズ地方にある都市であり、ウェールズに接している。バーミンガムから電車で1時間の距離、バーミンガムの西北西、約100kmに位置している。観光都市として知られ、11世紀に作られたシュルーズベリー城があり、残存する都市城壁内には、15～16世紀の木造家屋やステンド・グラスで知られるセント・メアリ教会など歴史的建築物が多い。『修道士カドフェル』で有名な僧院(Abbey)、そしてダーウィンの生家は、城壁の外にある。また、18世紀にセヴァン川に架けられた「世界初の鉄橋」(The Iron Bridge)が今でも現存し、1986年に「アイアンブリッジ峡谷」が、ユネスコにより世界遺産に登録された。
- (24) シュルーズベリー校は、1552年に創設された私立の寄宿学校であり、いわゆるパブリック・スクールである。パブリック・スクールについて、ウィキペディアをそのまま引用する。「近世になるとともに、貴族の身分に属さない富裕階層であるジェントルマンが勃興するなかで、親の出生や身分に関係ない学校が必要となる。このような背景の中で、以前の学校と違い、一般(パブリック)に開かれた寄宿生の私立学校であるウェストミンスター、ウィンチェスター、イートン、ハロー、ラグビー、マーチャント・テイラーズ、セントポールズ、シュルーズベリー、チャーターハウスなどがパブリック・スクールと俗称されるようになる。これらの学校が非常に優秀な教育機関であり、その活動には公共的意義があることが広く社会に認識されたことも「パブリック」スクールと呼ばれることになった一因であると言われている。」
- (25) チャールズ・ダーウィン『ダーウィン自伝』(八杉龍一・江上生子訳、ちくま学芸文庫(筑摩書房)、2000年)、44頁。
- (26) 同書、46頁。
- (27) 同書、48頁
- (28) 同書、46頁。
- (29) 同書、63頁。
- (30) 『種の起源』(1859)を発行し進化論を唱えたことで、教会と対立したことを示す。
- (31) ダーウィンは、自伝で次のように語っている。「私が正統派の教会からどれほど激烈に攻撃されたかを考えてみると、私が一度でも牧師になろうと思ったなどということは馬鹿げているように思われる。私のこの志望および父の希望が正式に放棄されたことは一度もなく、ただ私がケンブリッジを卒業し博物学者としてビーグル号に乗り組んだときに自然死をとげてしまったのだ。」(『ダー

- ウィン自伝』, 64 頁)。
- (32) メンデルの法則で有名なメンデル (Gregor Johann Mendel, 1822-1884) も、オーストリア帝国のモラヴィア地方ブリュンの修道院の司祭である。メンデルが、自然科学の関心をもったのは、1847年司祭として修道院の生活を始めた時であると言われ、エンドウ豆の交配実験は、修道院の庭でえんどう豆を育てることではなされた。1853年から1868年のことである。
- (33) 『ダーウィン自伝』, 72 頁。
- (34) 同書, 編者注記, 80 頁。
- (35) 同書, 83 頁。
- (36) ビーグル号の大きさだが、幅 24 フィート (7m31cm), 長さ 94 フィート (28m65cm), 242 トンである。74 人の乗組員。
- (37) 『ダーウィン自伝』, 83 頁。
- (38) 同書, 64 頁。
- (39) 現在のお金に換算すると、およそ 500 万円もかかったというが、定かではない。
- (40) 父ロバートの反対意見をダーウィンがまとめたもの。「1, 将来の聖職者としての私の性格にたいして悪い評判がたつこと。2, 乱暴な計画であること。3, 私よりさきに多くの人にたいして博物学者の地位の提供が申し出られたにちがいないこと。4, そして、それが受け入れられなかったことからすれば、その船か探検かに難点があるに違いないこと。5, 私が将来、着実な生活に落ち着かないようになるにきまっていること。6, 私の待遇が不快なものであるだろうこと。7, 父すなわちダーウィン博士は、私がまたも職業を変えようと考えてあろうこと。8, そんなものを引き受けてもなんの役にたたないであろうこと。」(『ダーウィン自伝』, 編者注記, 314-15 頁。)
- (41) 『ダーウィン自伝』, 314 頁。
- (42) 同書, 84 頁
- (43) 母スザンナの弟 (1769-1843), 父ロバートより 3 歳下の叔父さんであり、後に結婚することになる従姉妹のエマの父親。
- (44) フランシス・ダーウィン「ノート 2 航海にたいするロバートの反対とその克服」, 『ダーウィン自伝』, 311 - 12 頁。
- (45) 同書, 312 - 13 頁。
- (46) 同書, 84 頁。
- (47) 『ビーグル号航海記 上』, 14 頁
- (48) ダーウィンの住んでいた Upper Gower Street 12 は、今は、ロンドン大学ユニバー

## ダーウィンをめぐる三題噺（的射場）

シティ・カレッジ・ロンドンのダーウィン館（Darwin Building）になっている。  
プレートによれば、1838年から1842年まで住んでいた。

- (49) ビーグル号の航海で胃腸の病気に罹り、それがダーウィンを生涯苦しめた。ヴィクトリア時代の著名人の中で一番病弱だったそうだ。
- (50) 10人の子どもをもうけ（そのうち2人は幼くして死に、娘の1人は10歳で亡くなっている）、子どもたちは銀行家、天文学者、数学者兼医者、土木技師兼実業家そしてケンブリッジ市長、軍人および政治家となった。子どもを溺愛しており、子どもの一人は「甘い父親に子どもとしてどう対応していいのか戸惑うほどであった」という感想をもらしている。
- (51) ダウン・ハウスでもらったパンフレットによれば、現存する手紙は14,500通であり、それ以上の手紙をもらい書いたと推測されている。40年で割ると年間360通、つまり、単純計算すると1日か2日に1通の手紙を受け取り、返事を書いていることになる。
- (52) フランシス・ダーウィン「チャールズ・ダーウィンとエラズマス・ダーウィン」『ダーウィン自伝』所収、214頁。
- (53) ダーウィンの生涯にわたる心身の不調は、「うつ病と強迫観念と不安とヒステリー症の複合」であり、「ダーウィンがその暴君的な父親に向けて無意識下に感じていた敵意、憎悪、怨恨の歪められた現れ」である、という。（フランシス・ダーウィン「ノート5 チャールズ・ダーウィンの病身」『ダーウィン自伝』、335 - 336頁。）
- (54) ダーウィンは、聖歌隊席の北側の裏壁から内陣に入ってすぐのところに埋葬されている。
- (55) ダーウィンの『種の起源』の熱心な擁護者。Mines王立学校（現在のインペリアル・カレッジ）で講義。

## ダーウィン年表

- 1809年 2月12日 イングランドのシュルーズベリーで誕生。
- 1817年 7月 8歳 母親スザンナ（Susannah Darwin, 1764-1817）、シュルーズベリーのザ・マウントで逝去（53歳）。
- 1818 - 25年 シュルーズベリー校の寄宿生となる。
- 1825 - 27年 16歳～18歳 スコットランドのエディンバラ大学で医学を学ぶ。
- 1828 - 31年 19歳～22歳 イングランドのケンブリッジ大学で神学を学ぶ。
- 1831 - 36年 22歳～27歳 測量船ビーグル号で世界一周の航海をする。

- 1837年 種の変化に関する最初のノートブックを書き始める。
- 1838年 博物学者との交流や学会の便もあってロンドンに居を構える。マルサスの『人口論』を読む。
- 1839年 30歳 1月エマ・ウェッジウッドと結婚。12月 長男ウィリアム誕生。『ビーグル号航海記』出版。
- 1839 - 43年 ビーグル号の動物学に関する3巻の本を執筆。
- 1842年 33歳 ロンドンを離れてダウン・ハウスに転居。
- 1844年 進化に関する未発表のエッセイを書く。
- 1848年 父親のロバート(1766-1848), シェルーズベリーのザ・マウントで逝去(82歳)。
- 1851年 娘アニーの死(10歳)。
- 1855年 進化に関する大著の執筆を開始。
- 1858年 ダーウィンとA・R・ウォレスの進化論に関する論文が、ロンドンのリンネ協会で見上げられる。
- 1859年 50歳 『種の起源』を出版。
- 1877年 68歳 ケンブリッジ大学から名誉博士号を贈られる。
- 1882年 73歳, 4月19日, ダウン・ハウスで死去。ウェストミンスター寺院に埋葬された。
- 1896年 妻のエマ逝去(88歳)。

## 参考文献

### 一次文献

James D. Watson (ed., with commentary, by), *Darwin: The Indelible Stamp* (London: Running Press, 2005).

チャールズ・ダーウィン『ビーグル号航海記』(島地威雄訳, 岩波文庫(岩波書店), 上 1959年, 中 1960年, 下 1961年)。

チャールズ・ダーウィン『種の起源』(八杉竜一訳, 岩波文庫(岩波書店), 上 1963年, 下 1971年)。

チャールズ・ダーウィン『種の起源』(渡辺政隆訳, 光文社古典新訳文庫(光文社), 上 2009年, 下 2009年)。

チャールズ・ダーウィン『ダーウィン自伝』(八杉龍一・江上生子訳, ちくま学芸文庫(筑摩書房), 2000年)。

## 二次文献

Eversley, George Shaw-Lefevre, *Commons, Forests and Footpaths: The Story of the Battle during the Last Forty-five Years for Public Right over Commons, Forests and Footpaths of England and Wales* (London: Cassell and Company, 1910, rep. by Kessinger Publishing).

Healey, Edena, *Emma Darwin: The Inspirational Wife of a Genius* (London: Headline Book Publishing, 2001).

White, Michael and Gribbin, John, *Darwin: a life in science* (A Plume Book, 1995).

レベッカ・ステフォフ『ダーウィーン―世界を揺るがした進化の革命』（西田美緒子訳、大月書店、2007年）。

大野真弓編著『イギリス史（新版）』（山川出版社、1975年）。

## 付 記

ダーウィーン研究者でもない筆者が、このような研究ノートを書いたのは、ダーウィーンが40年も住んだというダウンの村のダウン・ハウスへのウォーキングがきっかけである。2012年の春、ロンドン大学で在外研究中だった川島先生を訪ねたが、その時に、先生のお誘いでダウン・ハウスまでの往復6時間のウォーキングをした。先生のお陰で初めてパブリック・フットパスなるものの存在も知った。ダーウィーンが住んでいたダウン・ハウスは、閉館で残念ながら見ることはできなかったが、33歳の若さでこの豪邸を手に入れたということが、僕にとっては驚きだった。

幸いなことに大学から2013年4月1日から同年9月15日まで在外研究の機会を与えていただいた。ロンドン大学 SOAS にお世話になった。今回は、期間が短いということもあったので、自分が関心もっていた思想家の生家や墓地などを精力的に見て廻ることも研究の課題にいられた。その中でもダーウィーン関連の地はほとんど巡り歩いた。近くはロンドン大学や彼が埋葬されているウェストミンスター寺院、ロンドン近郊のダウン・ハウスやケンブリッジ大学のクライスト・カレッジ、遠くは彼が生まれ育ったシュルーズベリーやスコットランドのエディンバラ大学まで足を運んだ。

この研究ノートは、ダーウィーン縁の地をいろいろと歩き周りながら考えたことなどを、2013年11月3日の楓門祭の政経学部企画の帰朝報告会で報告したが、その時のレジュメから写真や図などを省いて再構成したものである。